

特集 地域支援

「チョイソコつまごい」

～地域交通の維持に協力し、
地域の活性化を目指す～

群馬トヨタ自動車 株式会社

進行する急速な人口構造の変化

群馬トヨタ自動車 株式会社（横田 衛 代表取締役社長）は2021年1月、群馬県吾妻郡嬭恋村との間に「包括連携協定」を締結。同年10月からデマンド型乗り合い送迎サービス「チョイソコつまごい」の実証実験を開始した。スタート当初は、村内の一部エリアにおいて運行を開始し、2022年4月からは万座エリアを除く村内全域に運行地域を拡大させている。

利用対象は、嬭恋村に住民登録をしている65歳以上の方、または障がい者手帳を持つ方とされ、村役場で会員登録を行い、会員証の発行をもって利用可能となる。なお、10月1日から18歳以下も対象となる。

乗車申込みは、電話の場合は利用希望日の2週間前から当日30分前まで、インターネットの場合は1週間前から当日30分前までに連絡をすると、自宅前または指定の停留所で乗降することができる。運賃は1回につき200円（税込）。

土日祝日を除く月曜日から金曜日の8時30分から16時30分まで運行しており、

乗車申込みを受け付けると、複数の利用者の目的地・到着時刻を株式会社アイシンの専用システムで計算、最適なルートを導き出し、利用者の乗り合いを可能とし、目的地まで送迎する。なお、10月1日からは土曜日も運行が開始された。

同社は、「チョイソコつまごい」に先駆け、2020年4月から邑楽郡明和町（おうらくんめいわまち）において、トヨタモビリティ基金の助成事業として「チョイソコめいわ」の実証実験を行っており、「チョイソコつまごい」においてもその知見を活かしている。



横田 衛 社長

なお「チョイソコめいわ」は、2023年3月をもって実証実験を終了し、同年4月からは「明和町・明和町社会福祉協議会」が主体となって事業を継続。同社は、「エリアパートナー」として地域の取り組みに対する協賛やイベント出展に協力をしている。

現在、日本全体の問題として人口減少や一極集中、少子化、超高齢化社会などの課題が表面化しており、地方都市における公共交通も縮小傾向にある。特に、車を持たない、あるいは免許証を返納した高齢者にとって、通院や買い物といった日常生活において必要不可欠な移動手段に支障をきたすケースが増えている。こうした状況は嬭恋村も例外ではなく、人口減少と人口構造の変化が急速に進行し、地域経済の縮小や地域文化の衰退が危惧される要因となっている。

大家族は姿を消し高齢の核家族化が進む

群馬県北西部に位置する嬭恋村は、日本百名山でも知られる浅間山や四阿山、白根山など標高2千メートル級の山々に囲まれ、その雄大な自然をいつでも感じることが出来る高原の村である。夏の平



愛妻の聖地として古くから言い伝えのある嬭恋村に作られた「愛妻の丘」(右奥)の手前にはユニークな標識も

均気温は15〜20℃と冷涼で、昼夜の寒暖差が大きい。そのため、甘くみずみずしい野菜が育ち、中でも夏秋キャベツの出荷量は日本一だ。村内には10種の泉質が異なる源泉があり、秘湯・名湯の温泉巡りや、雄大な自然の中でゴルフ、トレッキング、スキーなど、季節を問わず様々なレジャーが楽しめる観光地となっている。

また、嬭恋村は「愛妻の聖地」として、村名は日本書紀に由来しており、第12代景行天皇の皇子「日本武尊（やまとたけるのみこと）」が東征中に妻を亡くし、碓日坂（今の鳥居峠）から「吾嬭者耶（あづまはや）」（ああ、わが妻よ、恋しい）とお嘆きになったという故事にちなんだと言われている。

こうした自然豊かで歴史ある同村には年間を通じて訪れる人々が絶えないが、実際の住民は高齢化している。若い世代は都会に出てしまい、かつてのように3世代、4世代で暮らすような大家族は姿を消し、村に残って農業を営む高齢の核家族化が進んでいる。

公共交通もバス路線が廃止されたり、採算の合わないJRの廃線の話が出るなど、利便性が低下している。

同村の総人口は、1万人超だった2005年以降減少傾向で推移し、2015年には9780人、2024年8月1日現在では8868人となっている（そのうち65歳以上は約3千人（約34%）。今後もこの減少傾向は進むことが予測され、2045年には6547人になると推計されている（出所：国立社会保障・人口



「チョイソコつまごい2号車」(ノア)



「チョイソコつまごい1号車」(ハイエース)

運行は地元の浅白観光自動車㈱に委託し、2台の車両を使って移動の支援を行う

問題研究所)。そして2045年時点における人口構成は、生産年齢人口は45・98%、老年人口は47・76%と逆転し、少子高齢化が一層進むことが懸念されている。

こうした中、同村では、人口減少対策を行っていくことも大切ではあるものの、それ以上に、まずは今暮らしている住民にとって住み心地が良く、子どもや孫が戻って来たくなるようなまちづくりを進めていくことが重要と考えている。そのため、同村は「第3期まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、しごとづくりや人の交流、結婚・子育て環境の充実、安心したまちづくりなどに力を入れ、民間との協働も含めて様々な事業を推進している。

そうした一環のひとつでもある「チョイソコつまごい」は、同社および同村では、単に会員登録者数を増やしていくだけでなく、実際に利用してもらうことで外出の機会を作り、日々の生活をより充実したものにしてもらいたいとの思いがある。そして地域住民が元気になり村全体が活性化されることが重要と考えている。

「チョイソコつまごい」の周知に当た

っては、村の広報誌やホームページ、チョイソコ通信、同社ホームページやSNSへの掲載、住民説明会の開催などによるほか、役場の各部署からも住民に声掛けを行っている。また、社会福祉協議会の協力を得て、民生委員や介護職員からも住民に周知するなど、様々な場面で会員登録を促しており、村を挙げて横断的かつ積極的に取り組んでいる。

なお、559人の登録者数に対し、利用経験者数297人。利用率(297人÷559人)は53・1%と、全国のチョイソコでもトップクラスの実績となっている(2024年7月現在)。

高齢者の活動を促すため、小売店や病院だけでなく、コミュニティセンターや総合グラウンド、ゲートボール場、ゴルフ練習場など様々な施設に設けた指定停留所は現在69か所。そのうち利用回数で上位を占める乗降場所は、食料品・生活雑貨等を扱うスーパー、クリニック、診療所等の病院関係、コンビニエンスストア、温泉施設等である。特に、コンビニエンスストアは高齢者にとってちょっとしたものを気軽に買いに行ける場所として人気となっている。

本格運行によりさらに利便性が向上

「チョイソコつまごい」は、本年10月から事業化され、本格運行が始まった。それまでは、道路運送法第21条による乗り合い運行(実証実験等期間限定の許可)であったが、10月以降は、同法第4条(乗り合いバス事業者による本格運行の許可)に切り替えて運行を開始した。

この本格運行がスタートした際の変更点としては、①婦恋村に隣接する長野原町にも一部停留所を追加し運行地域を拡大、②18歳以下も利用可能とし利用対象者を拡大、③土曜日の運行も追加し運行スケジュールを拡大など、地域住民にとってはさらに利便性が向上することとなった。

こうした今回の事業化に伴い、同社が事前に実施した住民へのヒアリング結果では、主に次のような回答結果が見られた。「チョイソコつまごいがあることで、社会が広がっただけでなく、村のコミュニティが広がった」、「チョイソコに乗車して、住民の方とお話するだけでも楽しい」、「自宅前まで来てくれることが何より嬉しい」、「料金200円には大変満

足している」、「他の自治体でもチョイソコを始めてもらい、停留所を他自治体まで広げて欲しい」、「土曜日運行が始まることで様々なイベントに参加できるようになり嬉しい」、「ドライバーとの会話も楽しく、婦恋村は温泉施設も充実しており満足している」。

こうした声が多いことから、利用者からは好評価を得ており、さらなる期待が寄せられていることが分かった。

今後の課題としては、ドライバーの確保が最大の課題とのこと。さらに利用者



「包括連携協定」締結式(2021年1月20日)における
横田 群馬トヨタグループ(株)社長(左)と熊川 婦恋村長(右)

が増え住民の期待に添えていくと、停留所や車両を増やしていく必要がある。また、全村民や観光客なども利用できるよう運行条件を拡大していくことも考えられる。その際、完全な自動運転が実現する世の中になるまでは、婦恋村の立地を熟知し、臨機応変な対応ができるこの地域出身のドライバーを継続して確保していきたいとの思いが同村にはある。

本格運行後も事業主体は婦恋村となるが、同社では引き続き密接なパートナーとして関わっていく意向だ。

横田社長は、「群馬県内で生まれ育った私自身が、この地域に恩返しをしたいという純粋な気持ちから、そして地場資本としてこの地に根差して事業を展開している当社が、地域に対して何ができるかを考えた時に、地域交通の維持に協力をしていくこととした」と話す。

今後さらに進む超高齢化社会や過疎化等の課題解決に取り組んでいくため、群馬トヨタグループでは「Grow To Gunma」群馬に輝きをををビジョンに掲げ、自ら群馬を元気にする活動、群馬を元気にする活動を頑張っている方々の応援をしていく。